

札幌市の障がい福祉を支えてきた歴史を胸に 社会福祉法人 札幌報恩会

厚別区社会福祉協議会は区内の地域福祉の推進を図るため、多くの施設・事業所・団体等のご協力をいただきながら事業を進めています。「シリーズ 正会員紹介」では、正会員として厚別区社会福祉協議会を支えていただいている皆さんをご紹介します。

第1弾となる今回は、法人設立以来100年以上の長きにわたり、札幌市の障がい福祉を牽引されてきた社会福祉法人札幌報恩会（山下太郎理事長）をご紹介します。

—100年を超える支援の歴史

社会福祉法人札幌報恩会は1918年に感化教育機関（児童自立支援施設に類似する施設）として、現在の中央区山鼻地区で創立されました。その後1949年に知的障害児施設へと転換を図り、同年、札幌報恩学園養護学校を設置。1952年に社会福祉法人となり、1962年には現在の厚別区上野幌地区への移転が完了します。

「札幌報恩会では支援度の高い方も積極的に受け入れてきました。」そう語る総合施設長の村田英男さんの言葉には長い歴史の中で組織が経験してきた苦楽がにじみます。「社会の方向性としては、可能な限り地域で生活できるように環境を整え、支援を組み立てていくことであることは理解しています。ただ一方で、どうしてもそれが難しい方もいらっしゃいます。そうした方が安心して暮らすことができる居場所に札幌報恩会はなってきました。」同法人のビジョンにも「地域社会も含め自立した生活がおくれるよう支援する」ことがうたわれています。それでも村田さんは、自立支援という名のもとに地域に放り出され、行き場をなくす方が出てしまわないよう、寄り添うことが大切であると考えます。

—多様なサービスの展開

同法人は多くの施設や事業所を運営しています。それぞれが利用者の声や時代の求めに応じて事業化されてきた経過があり、支援度やニーズに合わせたサービスが提供されています。

【ワークショップ上野幌】【ホープス】

主に通いの場である「生活介護」「就労移行支援」「就労継続支援A型・B型」のサービスを提供する事業所です。

「障がい福祉における通所施設は自力で通ってくる場合が多く、親が送迎しているケースも少なくありません。最近では利用者本人も親も高齢になり通ってくるのが難しくなっています。」施設長の富田弘樹さんは困難な課題を抱えています。「通いが難しくなって、入所施設を希望されても待機者がいる状態で、直ぐに入れる訳ではありません。また、札幌報恩会では通所施設でも支援度の高い方が多く、グループホームなどでの生活に合わない方もいらっしゃいます。」支援者が向き合っているのは「障がい」ではなく「人間」です。どんな方でも年齢を重ねていきます。障がい者支援の分野でも社会課題である高齢化の進展に直面しているのです。

「どのような分野でもそうだと思いますが、障がい福祉においても絶対的に受け皿が不足しています。受け皿を増やす

ためには財源と担い手が必要です。」富田さんは、多くの方がこうした現状を知るために積極的に情報を発信していくことが必要とおっしゃいます。

いち法人の訴えで変えていくことが難しい課題についても、大きなネットワークの中で取り上げて、社会課題として提言につなげていくことで、実現を目指していけるのではないかと。富田さんは社会福祉協議会に期待を寄せます。

【まごころ保育園】

「園の特徴としては、やはり様々な方との交流の機会があることでしょうか。」そう話すのは園長の中瀬由美さん。「障がい福祉に取り組んできた法人が運営する園ですので、障がいのある方と交流する場面もあります。また、元々地域とのつながりを大切にしている法人ですので、町内会敬老会のクリスマス会を法人の交流ホームで開催の際に園児を招待いただくなど、小さな交流ができて始めていました。」近年はコロナの影響で、施設内の開放が難しいとのことですが、落ち着いたらボランティアの受け入れなども通して、また地域の方との交流を再開させたいという思いがあります。

また、親の気づかない児童の発達に関する心配事について、中瀬園長は「なるべく早く気づき、専門機関へ相談することが本人のためであり、家族のためでもある。」と考えています。「それでも、実際に親御さんに伝える時には気が重たくなりますが、伝えて終わりではなく、つなぐところまでしっかりとサポートすることで、理解し受け入れてくれる方が多いです。」こうした視点も同法人の持つ強みなのかもしれません。

「近年、保育園に関わる痛ましい事件がニュースになると、保育士の日々の業務がいかに大変かについてもセットで報道されることも少なくありません。ただ、大変さを大きく上回るやりがいや魅力があるからこそ、資格を取り保育業務に携わっている大勢の保育士がいることを知って欲しい。」中瀬さんは力を込めて語ってくださいました。

【のぞみ寮】【くるみ寮】

社会で生活していく力をつけるための宿泊型自立訓練施設（のぞみ寮）、地域内で共同生活を行うグループホーム。区内16拠点あるグループホームの総称（くるみ寮）。



社会福祉法人札幌報恩会

総合施設長 ^{むらた}村田 ^{ひでお}英男さん

社会福祉法人札幌報恩会

電話：891-2020 住所：札幌市厚別区厚別町上野幌822番地

「障がいのある方が生活し、職員が勤務し支援を行っておりますが、それ以外は一般の方が地域のアパートなどで暮らしているのと変わりありません。他の方と同じように、日中は仕事や通所事業所などに出かけます。夜には帰ってきて、ご飯を食べて、お風呂に入って、くつろいで、寝ます。人の生活の場です。」何も特別なことが行われているわけではないと、管理者の竹村義文さんは笑います。

「だからご近所にお住まいの方にも、特別なことを求めたりすることはありません。」利用者の中には近くの道端で会った人に声をかけてもらったことをうれしそうに報告する方もいるそうです。

「地域で生活している以上、これからも地域の行事のお手伝いや町内会での役割などもできることはなるべくやっていきたいと思っています。」以前グループホームで町内会の班長を引き受けた時、地域の方とつながりお互いを知り合う機会となったことを竹村さんは振り返ります。

「障がいのある方が近所で暮らすことに不安を感じる方がいることは事実です。それでも我々は伝え続けるしかない。」地域の中で普通の暮らしを営むことができるよう、理解浸透を図りながら、竹村さんを含む支援者の皆さんは前に進むことを選択して活動しています。

—地域と共に

「地域に対して開かれた組織でありたいと願っています。」法人事務局長の富永一史さんは、コロナがまん延する以前を思い返します。敷地内のカフェや小ホールを活用したサロン、浴場の利用など、地域の方やお年寄りの方が施設の敷地内にいるのが日常の光景だったのだそうです。

「当法人が持つ専門性など、強みを地域に還元できることがあれば是非お手伝いしたい。」令和3年には敷地内に災害時の備蓄倉庫を設置し、非常時の備えも進めている札幌報恩会。これからも地域と共に障がい者や子育て世帯が安心して暮らしていける地域社会づくりを進めます。



社会福祉法人札幌報恩会
ワークショップ上野幌 ホープス サポート19
施設長 ^{とみた}富田 ^{ひろき}弘樹さん

社会福祉法人札幌報恩会
まごころ保育園
園長 ^{なか}中瀬 ^{ゆみ}由美さん

社会福祉法人札幌報恩会
のぞみ寮 くるみ寮
管理者 ^{たけむら}竹村 ^{よしふみ}義文さん

社会福祉法人札幌報恩会
法人 事務局長 ^{とみな}富永 ^{かずふみ}一史さん